

# 茶の湯文化学会会報 No.69

第69号 / 2011年 6月 24日 〒606 京都市左京区下鴨森本町15 TEL. 075-702-9270  
発行 茶の湯文化学会 -0805 生産開発科学研究所内 FAX. 075-702-9314  
http://www.chanoyu-gakkai.jp e-mail chanoyu@oregano.ocn.ne.jp

## 会長重任のご挨拶

谷 晃

この度の東日本大震災で被害に遭われた方々に心よりお見舞い申し上げます。また一日も早い復旧と復興を願っております。

このたびは茶の湯文化学会総会において、不肖私がかたがたに選任されました。今期会長を勤めますと三期六年間にわたりますのでいささか長すぎるのではないかと、思い、推薦を受けた当初はとまどいもありましたが、理事会や総会で強く推されたこともあり、お引き受けすることに致しました。

一期目の二年間は会長職の重責をこなすことだけで終わってしまい、さしたる成果も十分にはあげられなかったのではないかと今でも自問することがあります。そして二期目には職務に慣れてきたことで、当会の問題点をはつきり認識できるようになり、総会における再任の挨拶では経理の安定と、大会や研究会・例会の内容を課題として取り上げました。そのうち経理の安定につきましては、理事および会員の皆様のご協力を得てなんとか危機的状況だけは脱し得たのではないかと判断していますが、まだまだ安心できる状態ではなく、引き続き努力しなければなりません。

また各種行事の活動については、二期目の任期中にいくつかの地区例会が新たに活動を開始し、各行事への参加者も増加傾向にあり、表面的には当学会の活動が活発化したようにも見受けられます。しかしながら当初より行なわれている大会・研究会や例会においてはマンネリ化の懸念がなきにしもあらずです。それに加えて地区例会は地域の独自性を尊重することを第一義においておりますので、その内容や方法はかならずしも一定ではありません。そのため例会が主として対象としている地域以外から参加された方は、他の地区例会とは異なる運営方法にとまどいを感じられる方も少なからずおられるように聞いております。

ただ、だからといって例会のあり方や運営方針を強制的に統一することは、地域の実情にそぐわないことが出てくるおそれもありますので必ずしも上策とはいえないように思われます。むしろそれぞれの例会の運営方法をすべての会員の方によく理解していただくよう、これまで以上に詳しい内容を告知する必要があるのではないかと考えています。

そして三期目の今後二年間において取り組むべき課題としては、例会の独自性を含めた当学会行事の内容

について再検討し、より充実した、また多くの会員の皆様に満足していただけるようなものにするのがまず挙げられるでしょう。

今ひとつは、以前から検討されてはきたものの結論が出ずそのままになっている課題です。それは当学会の名称に関するもので、具体的には当学会は規約においても広く茶の文化全般を対象とすることが定められているにもかかわらず「茶の湯文化学会」と称しており、「茶の湯」の文字を冠した名称では茶の湯以外の茶文化にたずさわる人々が参加しにくいのではないかと意見があります。

特に近年は中国や韓国をはじめとする諸外国においても茶文化が盛んになり、多くの人が活動しています。それらの人々にとって「茶の湯」という名称は発音しにくいこともあってか、あまり認識されていないように見受けられます。私自身も茶の湯は、他に例をみない長い歴史と深い内容を持ちながらも、日本の茶文化の一形態であると考えており、「茶の湯文化学会」の名称のままでは、当学会は茶の湯以外の日本の茶文化を考慮していない、あるいは無視をしているのではないかと誤解されかねません。そのためたとえば「日本茶文化学会」などとしたほうが国内で

さまざまな茶の文化にたずさわっておられる人々が参加しやすくなり、また同時に外国で茶文化に関わる方々との交流もはかりやすいのではないかと考えております。

しかしながら当会のような任意団体であれ、また法人格をもつ団体であれ、その名称を変更することは重大な意味をもちますので、軽々に変更することはできません。したがって十分な時間をかけて、理事会や総会などで検討を重ねる必要があります。

このように三期目もいくつかの課題を抱えており、しかもいずれもむずかしい課題ではありますが、精いっぱい努力致す所存ですので、会員の皆様にはよろしくご協力のほどお願い申し上げます。



「漢陽寺の茶臼」

沢村信一

漢陽寺は、山口県周南市大字鹿野にある臨濟宗南禅寺派の寺院である。地理的には、周南市の山陽新幹線徳山駅から北へ約三〇km、または山口市から中国自動車道を東へ約四〇kmの鹿野インターチェンジから数分のところ

にある古刹である。一三七四年大内盛見（もりはる）が開基となり、名僧用堂明機禪師を招いて開山した。

漢陽寺には、茶の湯文化学会会報六七号で紹介した室生寺の茶臼と同じ蓮華紋を有した茶臼が現存している。この茶臼は、輝緑岩製で、上臼の直径16・3センチメートル、高さ12・3センチメートル、下臼（受け皿）直径33・3センチメートル、高さ9・2センチメートルであり、室生寺の茶臼より少し小振りである。挽き手の差込口の模様は、蓮華紋であり、室生寺のものと同様に良く似ている。（古代學研究所研究紀要、第六輯、日本における茶臼の研究、桐山秀穂、一九九六）

この茶臼は、寺伝では一三七四年、用堂禪師が明代の中国から持ち帰ったとされ、三輪氏も著書（ものと人間の文化史二五 白、法制大学出版局、一九七八）のなかで、中国からの伝来であろうとしている。茶臼を実際に観察した三輪氏は、摩耗してほとんど消えているが溝が周縁部まで切つてあると記録している。一方桐山氏は周縁平滑型として十五世紀前半の作と分類している。三輪氏は周縁平滑型茶臼の出現は元禄期以降としており、この点で見解が異なる。

この見解の違いを確認する目的で、二〇一〇年十二月に、山口県立大学園田純子講師に同行していただき、漢陽寺を訪れ、茶臼を見せていただいた。訪ねた時、住職と先代の住職にお会いすることができた。先代の住職は四〇年ほど前に、三輪氏が調査のために漢陽寺を訪ねたことをよく覚えており、懐かしそうに話していた。

漢陽寺の茶臼と室生寺のものを比較すると、石の色の違いに気づく。室生寺のものは、少し白っぽい感じだが、漢陽寺の茶臼は、青黒みがかった色をしている点で、同じ産地の石ではないと思われる。室生寺のものは中国産の輝緑岩とされており、漢陽寺の茶臼は一見してこれとは違うと考えられ、宇治の上林記念館にある宇治産の茶臼と同じ石と考えられる。撮影した写真を宇治市歴史資料館館長の坂本博司氏に見てもらったところ、第一印象として宇治石であろうとであった。

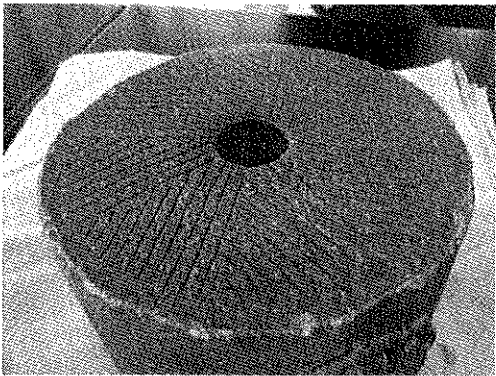


図1 漢陽寺茶臼（上臼）

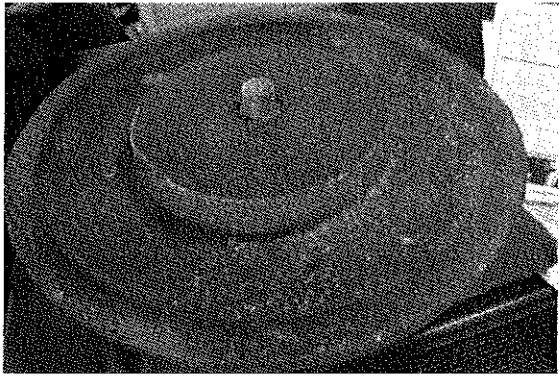


図2 漢陽寺茶臼（下臼）

漢陽寺の茶臼の溝は、三輪氏が指摘しているように非常に摩耗しており、一見すると周縁平滑型の茶臼のように見える。周縁部まで達している溝は非常に浅く、後年自立てを行ったと思われる深い溝は、その時代の掘り方に習ったのか周縁部まで達しておらず、元の溝とは明らかに異なるし推測される。桐山氏は、漢陽寺の茶臼の溝に関して写真から周縁平滑型と判断したものと考えられる。

全体の仕上げ状態をみると、室生寺のものが非常に精巧に仕上げられているのに対して、漢陽寺の茶臼は稚拙さが目立つ。具体的には、受け皿の面が水平に仕上がっておらず傾斜している。また、全体の仕上げに関しても、室生寺のものがなめらかに仕上げられているのに対して、漢陽寺の茶臼は、凹凸が目立つ仕上げとなっている。坂本氏によれば「初期の美術工芸品は丁寧につけてありレベルが高いが、時代が下がるに連れて雑になって行く」傾向があり、この点から室生寺と漢陽寺の茶臼を比較すると、室生寺のものは精巧にできているのに対して、漢陽寺の茶臼の稚拙さが目立ち、製作年代が下がる可能性がある。

国内での茶臼の初見は、金沢文庫古文書（一三〇七年）になり、桐山氏は出土品から十三

世紀半ばまで遡るとしている。漢陽寺の寺伝によると一三七四年に用堂禪師が茶臼を持ってきたとすると、日本国内に存在する茶臼の初期の作品に相当する。また、漢陽寺の茶臼が宇治石であれば、いつ頃から宇治石を使った茶臼が作られていたかが問題となるが、石製品である茶臼の時代考証は困難であり、時代の特定が難しく、このような研究事例が見当たらない。

最後に大きな疑問点が存在する。漢陽寺は大内氏滅亡に際して、戦災に遭遇している点である。戦災前の漢陽寺には、大内氏の紋所（大内菱）が多くあったようだが、現在の寺では再建に携わった毛利氏の紋所（一文字三ツ星）が存在し、大内氏の紋所はないようである。また、福井県一乗谷朝倉氏資料館に展示されている茶臼は、落城時に火災にあっている。この茶臼は、表面が変色しており、ひび割れが多数あり、いかにも戦災にあった感じがする。しかし、漢陽寺の茶臼は、表面上の変化は見られず、漢陽寺が戦災にあった時に、寺に存在していたのであれば一乗谷の茶臼のように、表面の色などの変化が見られてもおかしくない。この点から、漢陽寺の茶臼は、再建以降に持ち込まれた可能性も考えら

れる。そうであれば、茶臼の製作年代は、十六世紀半ば以降、また溝の切り方から元禄期以前となる。

以上のように、石製の茶臼の時代考証は難しい。出土品などは、同時に出土したものや遺跡の時代から年代が推測可能であるが、伝来品で記録が残っていない場合は、石の種類・模様・彫りの精巧さなどからの推測となる。これらを総合的に考察すると、漢陽寺の茶臼は、宇治石でできており彫りの具合から一三七四年の開山当時から存在すると考えるより、それ以降の時代に持ち込まれた可能性が高い。また、戦災の影響を考慮すると十六世紀半ば以降、元禄期までの作と考えるのが妥当であろう。

### 理 事 会

平成二十三年度第一回理事会が、四月三十日（土）午後二時から池坊短期大学第二会議室で開催された。出席者は、会長以下、あわせて十五名、議題は以下の四題であった。

- ① 総会に提出する議案について  
平成二十二年事業報告・決算報告  
平成二十三年事業案・予算案

ための準備委員会を立ち上げるようになった。④では岩崎理事より、「はなやか関西」文化首都年二〇二二の企画についての説明があった。

### 例 会

#### 東京例会

（平成二十三年一月二十九日）

「旗本茶人・舟越永景

―その支持のバックボーン―

八尾嘉男

本報告は、昨年度第三回近畿例会で行なった報告の再検討にあたる。舟越永景（叙任官位・従五位下、伊予守、慶長二年〜寛文十年・一五九七年〜一六七〇年）は、元和二（一六一六）年の大御所・家康の死去に伴う江戸勤仕転任まで駿府で小姓役を勤め、寛永十五（一六三八）年に建物の造営・修繕等を管掌する作事奉行職に就任している。

茶会は、慶長十六（一六一二）年九月八日・九日（父・景直が没し、家督を継いで約半年後）の他会と自会（『松屋会記』）以外には、寛文五年十一月八日の第四代將軍・家綱への献茶が見いだせる。報告は慶長十六年の茶会

- ② 役員改選・役割分担
- ③ 創立二十周年記念事業について
- ④ その他

①では平成二十二年事業報告と決算書が読上げられて報告され、異議なく承認された。続いて平成二十三年事業案が各例会担当者より説明があり、未定の行事は総会までに内容を決めて連絡することになった。②では前回理事会で、次期会長に推薦された谷会長から、副会長以下の役員改選について提案があった。副会長は、退任の神谷昇司氏と高橋忠彦氏に替わり、谷端昭夫氏と中村修也氏にお願いし、影山純夫氏には留任をお願いしたい。参与については変更なし。監査は逝去された久田宗也氏に替わり小川後楽氏にお願いし内諾を得ている。理事は、金澤弘氏が退会に伴い退任、小川後楽氏が監査へ、谷端昭夫氏と中村修也氏が副会長になるため四名の退任となる。神谷昇司氏と、高橋忠彦氏は理事へ戻っていた。現在幹事で金沢例会を担当している吉井清氏と国際基督教大学教員の谷村玲子氏を新理事として推薦する。二名の欠員は補充せずそのままとしておく。以上の説明の後、異議なくすべて承認された。

幹事については、福良弘一郎氏、原田茂弘

を概観し、寛文五年の献茶は江戸幕府の正史編纂書『徳川実紀』（『厳有院殿御実紀』）から検討を始めた。『徳川実紀』の記述は將軍・家綱が薨去し、院号「厳有院」となって以降に成立している。『徳川実紀』からは従来看過されたきた史料を踏まえ、舟越と片桐石州が寛文五年までに宗匠となり、その高名さから献茶者に選ばれたこと、記述成立時の両者の系譜を継ぐもの有無が従来の評価を導いていたことを述べた。更に、幕府の日記『江戸幕府日記』（『柳營日記』）から、舟越も家綱の御意に適い、御膳が供されたことを確認した。また、この寛文五年に献茶が催されたことは、谷端昭夫氏の「教示の通り、前年から順次実施されていた寛文印知という所領の再確認・文書の再交付政策が背景にある」といえる。

続いて、『久重茶会記』や井伊直弼の茶会記等から、好み物や自作の道具が存在していること、現在、サンリツ服部美術館に所蔵される「紹鷗茄子」の添え状から目利きであったことを確認した。また、小堀遠州の江戸帰参時、江戸での茶会開きの客衆の一人として定着していたことを述べた。最後に、舟越が指示を得た背景にも関わる教養の裏付けにつ

いて、実孫（嫡男は家督相続前に亡くなって  
いる）や家族・家中と鹿苑寺住職・鳳林承章  
の交流を見ることから、京都との関わりの可  
能性に触れることで報告を終えた。

「付記」

本報告は、財団法人三徳庵・平成二十一年  
度茶道文化奨励研究助成の成果を継続検討し  
たものです。その旨を明記しますと共に、財  
団法人三徳庵様に改めてお礼申し上げます。

（平成二十三年五月十四日）

「羽箒について2―実測調査と文献の照合で  
わかって来た茶人の好みと思い入れ―」

下坂玉起

五年半前、初めて羽箒の発表をした時には  
まだ不明なことだらけだったが、平成十九年  
度と二十年度の（財）三徳庵の茶道文化学術  
研究助成を頂けたお陰で、これまでに全国の  
羽箒を五百本近く調査でき、伝書類や目下唯  
一の羽箒専門書『羽箒一件』（江戸中期の遠  
州流・青木宗鳳著、今日庵文庫蔵）も拝見で  
きた。その上、上田家の茶書や『茶譜』の出  
版もあり、大幅に情報が増え、羽箒の形態に  
ついてはだいぶ分かってきた。

古文獻には、羽箒の柄の仕立て方（竹皮の

巻き方、端の折返し方、紐の種類、紐の結び  
目の位置、紐上・紐下・折返の寸法、掛け緒  
のつけ方など）が驚くほど具体的に書かれて  
いた。羽箒は茶人自ら作るものだったからで、  
「もぎあけ（羽弁と柄の間にあけた羽軸だけ  
の部分）」や巻止など微細な部分にも茶人た  
ちの繊細な美意識が示されていた。

利休が創始したとされる羽三枚を、状に少  
しずらす重ね方は、遠州流、石州流系の古い  
羽箒にも、千家十職で羽箒担当の飛来一閑家  
の手本にもあり、今も藪内流や尾州久田流の  
羽箒はその重ね方である。戦前くらいまで、  
遠州流の宗匠は自伝来仕立ての羽箒を、近  
代数寄者は独自の好みの羽箒を作っていた。  
しかし、柄の端を尖らせ、八寸前後から現  
在の一尺余に大きくしたことについての情報  
は見つからず、現在一番当たり前の羽箒が最  
も謎である。

羽箒は茶人の好み分かる貴重な歴史資料  
でもある。傷んでも決して捨てずにぜひ後世  
に伝えて頂きたい。

例会のご案内

東京例会

七月二日（土）（会場：根津美術館  
午後二時）

「江戸時代における名物裂の価格例」  
佐藤留実氏

「「お茶」から広がる文芸世界」  
田中秀隆氏

九月三日（土）（会場：未定 午後二時）

「陸廷燦の『続茶経』について」  
高橋忠彦氏

「備前焼茶入について」 下村奈穂子氏  
十一月十九日（土）（会場：未定  
午後二時）

「細川家伝来茶入に付属する仕覆・挽家袋  
裂の銘について」 小山弓弦葉氏  
「古筆切（仮）」 松原 茂氏

一月二十一日（土）（会場：未定  
午後二時）

「豊臣秀吉の吉野の花見と、吉野花見図屏  
風」 三宅秀和氏

「茶の湯と昭和初期日本におけるデザイン  
運動」 細谷 誠氏

静岡例会  
八月二十七日（土）（会場：静岡文化芸術大  
学 午後一時半）

「高麗茶碗について」 赤沼多佳氏

九月二十五日（日）（会場：袋井市立中央・  
南公民館 午後一時半）

「日本煎茶史概説」 船坂富美子氏

「急成長する中国茶業と茶文化」

一月二十八日（土）（会場：未定（静岡市内）  
午後一時半）

「竹川竹斎と静岡」 岩田澄子氏

「江戸時代の静岡の茶」 中村羊一郎氏

東海例会（会場：名古屋文化短期大学  
アセンブリホール 午後二時）

九月二十四日（土） 谷端昭夫氏

「千家七事式の創案」

十一月十九日（土） 佐藤豊三氏

「尾張徳川十代斉朝の懐石」（仮題）

近畿例会

七月九日（土）（会場：池坊短期大学  
第一会議室 午後二時）

「炭手前についての一考察」岸本真理子氏

「盧同の茶」 木村栄美氏

十月一日（土）（会場：ハートピア京都第五

会議室 午後二時）

「日常の行いを型として学ぶこと」

「未定」 杉谷朱美氏

「未定」 未定

金沢例会（会場：未定）

十一月六日（日）

「未定」

「未定」

森田宗園氏

未定

北陸例会（会場：蔵六園 午後二時）

七月二日（土）

「九谷陶磁器について」 中越康介氏

「蔵六園の建物について」 吉江勝郎氏

会場 蔵六園

石川県加賀市橋立町ラ四七

TEL0761-75-2003

（J.R北陸線加賀温泉駅からキャ  
ンバス海まわり線で約二九分、

「蔵六園」下車すぐ）

高知例会（会場：高知県立文学館慶雲庵茶室）

七月三日（日）（十時～十二時）

「茶の湯文化学会平成二十三年大会の研究  
発表をテーマとしたシンポジウム」

七月二日（土）（会場：根津美術館  
午後二時）

「江戸時代における名物裂の価格例」  
佐藤留実氏

「「お茶」から広がる文芸世界」  
田中秀隆氏

九月三日（土）（会場：未定 午後二時）

「陸廷燦の『続茶経』について」  
高橋忠彦氏

「備前焼茶入について」 下村奈穂子氏  
十一月十九日（土）（会場：未定  
午後二時）

「細川家伝来茶入に付属する仕覆・挽家袋  
裂の銘について」 小山弓弦葉氏  
「古筆切（仮）」 松原 茂氏

一月二十一日（土）（会場：未定  
午後二時）

「豊臣秀吉の吉野の花見と、吉野花見図屏  
風」 三宅秀和氏

「茶の湯と昭和初期日本におけるデザイン  
運動」 細谷 誠氏

静岡例会  
八月二十七日（土）（会場：静岡文化芸術大  
学 午後一時半）

飯後の茶事 席主 柏井武氏

（十三時～十六時）会費二千円（軽食付き）

九月十一日（日）（十時～十二時）

茶杓の歴史「西山松之助著『茶杓百選』」  
柏井 武氏

茶杓削り 指導者 永吉溪滋氏・森一康氏

（材料代千円）

十二月十一日（日）（十時～十二時）

茶の湯関係文献を読み所感の発表

「茶の湯名言集」田中仙堂著 井上佳彦氏

「よくわかる茶道の歴史」 谷端昭夫著

「敵味方をこえて」芸道の理念と実践（茶  
道を中心に）倉澤洋行著 柏井 武氏

茶事 席主 福田悦子氏（十二時～十六時）

会費五千元

二月十二日（日）（十時～十二時）

「石州流三百ヶ条不白答（上）常用文」  
柏井 武氏

一般の方が茶の湯に親しんでもらうため  
の茶席を設ける。

会場 高知県立文学館慶雲庵茶室

時間 十時～十六時まで

開催予定日 高知新聞伝言板に掲示

（会費三百円）

お知らせ

\*先日の大会会場で「茶道百科ハンドブック」と「茶の湯デザイン」という雑誌の忘れ物がありました。学会事務局でお預かりしています。

